

十二、夏草の茂れる跡の

工場の濁りの水の

泡立ちて海にそ、げば

番匠の母なる川の

その嘆き消ゆる日はいつ

遠き日の藍を恋いつ、

(三) 俳句 観世音

三浦 エミ子

(会員・佐伯市海崎中野西区)

たなごころ開きてゆれる紅芒

剝製の日本カモシカ紅葉宿

花芙蓉今日美しく咲きおわり

それぐの生立寂し秋の草

胸に珠いだき秋思の観世音

表紙解説

今回も前号に引き続き鍍絵を紹介した。写真は直川村間庭 木下氏宅の倉に残っているものである。

鍍絵は何処でも同じように、倉につきものの、「折りカギ」(足場などを結わえるためにつけられたし型の金具)を軸として実にうまく仕上げている。

編集部

◆訂正とお断り

前号二五頁の表紙解説で、写真の鍍絵は佐伯市大越(武田仁氏宅)とありましたが(武田幸治氏宅)の誤りでした。お詫びして訂正します。